

風しんの第5期の定期接種対象の方へ

予防接種前に必ずお読みください。

- ◎現在、風しんの予防接種は、予防接種法に基づき公的に行われています。しかし、公的な予防接種を受ける機会がなかった昭和37年4月2日から昭和54年4月1日までに生まれた男性は、抗体保有率が他の世代に比べて低くなっています。
- ◎風しんの抗体検査を受けて、風しんの抵抗力がないこと（抗体なし）が分かった場合、風しんの抵抗力（免疫）をつけるため、予防接種を受けましょう。
- ◎風しんの抗体がないと、風しんにかかるリスクがあります。接種に当たっては、効果や副反応などについて理解してから、予防接種を受けてください。

1 接種に当たっての注意事項

予防接種の実施においては、体調の良い日に行うことが原則です。健康状態が良好でない場合には、かかりつけ医等に相談の上、接種するか否かを決めてください。また、次の状態の場合には、予防接種を受けることができません。

- ・明らかに発熱（通常37.5℃以上）がある場合
- ・重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな場合
- ・本予防接種の接種液の成分によってアナフィラキシーを起こしたことがある場合
- ・明らかに免疫機能に異常のある疾患を有する場合及び免疫抑制を期す治療を受けている場合
- ・その他医師が不適当な状態と判断した場合

2 接種後の注意

- ・接種後30分間は急な副反応が出る場合があります。医療機関で待機するか、医師とすぐに連絡が取れるようにしてください。また、接種後、接種部位の異常な反応や体調の変化があった場合は、速やかに受診してください。
- ・接種後4週間は副反応の出現に注意してください。
- ・当日は、激しい運動は避け、なるべく静かに過ごしてください。
- ・大量の飲酒はそれ自体で体調の変化を来すおそれがあるので、接種後24時間は避けるようにしてください。
- ・当日の入浴は差し支えありませんが、接種部位をこすらないでください。
- ・接種後は、他の予防接種を受けるまでに一定期間をあける必要があります。（予防接種の種類によって期間は異なります。）



1 風しんの症状について

風しんは、風しんウイルスの飛沫感染によって発症します。ウイルスに感染してもすぐには症状が出ず、2～3週間の潜伏期間がみられます。その後、麻疹より淡い色の赤い発しん、発熱、首の後ろのリンパ節が腫れるなどが主な症状として現れます。また、そのほかに、せき、鼻汁、目が赤くなる（眼球結膜の充血）などの症状がみられることもあります。子どもの場合は、発しんも熱も3日程度で治ることが多いので「三日ばしか」と呼ばれることがあります。

合併症として関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。血小板減少性紫斑病は風しん患者3,000人に1人、脳炎は風しん患者6,000人に1人ほどの割合で合併します。大人になってからかかると子どものときより重症化する傾向がみられます。

妊婦が妊娠早期に風しんにかかると、先天性風しん症候群と呼ばれる病気により、心臓病、白内障、聴力障がいなどの障がいを持った赤ちゃんが生まれる可能性があります。

2 予防接種の効果と副反応について

ワクチンを1回接種することにより、95%以上の人が免疫を獲得することができます。体内に免疫ができると、麻疹や風しんにかかることを防ぐことができます。いつまで免疫が持続するかどうかは、獲得した免疫の状況や周りの流行によって異なります。ただし、予防接種により、軽い副反応がみられることがあります。また、極めて稀ですが、重い副反応が起こることがあります。

3 麻疹風しん混合ワクチンの主な副反応

（風しんの第5期定期接種に使用。風しんと麻疹同時に免疫をつけます。）

主な副反応は、発熱（接種した者のうち20%程度）や、発しん（接種した者のうち10%程度）です。これらの症状は、接種後5～14日の間に多くみられます。接種直後から翌日に過敏症状と考えられる発熱、発しん、掻痒（かゆみ）などがみられることがあります。これらの症状は通常1～3日でおさまります。また、接種部位の発赤、腫れ、硬結（しこり）、リンパ節の腫れ等がみられることがありますが、いずれも一過性で通常数日中に消失します。

稀に生じる重い副反応としては、アナフィラキシー様症状（ショック症状、じんましん、呼吸困難など）、急性血小板減少性紫斑病（紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等）、脳炎及びけいれん等が報告されています。

【問合せ先】海老名市健康推進課

電話 046-235-7880

